

かごしまの“うた”



霧島山在日向州
三百六十里相
好者共焉。
國字爲漢文。
尤倬詭讀之不
之奇祭如列眉
南溪東西遊記

館長あいさつ

平成11年度から開催しております鹿児島大学附属図書館貴重書公開は、今回で第22回を迎えました。本事業は、本学学術研究院法文教育学域の研究者及び図書館職員による貴重書管理委員会において、数年前にはテーマを決定し、公開内容の検討や解説文の作成等の準備を行っております。本年度は、多田蔵人准教授（法文学系）監修のもと、タイトル「かごしまの“うた”」として、各専門分野からさまざまな“うた”をご紹介します。新型コロナウイルス感染拡大防止策のため、開催形式が例年とは異なっておりますが、本図録等を通して、鹿児島の文化の新たな一面を発見いただく機会となりましたら幸いです。最後になりましたが、本貴重書公開にあたりご協力いただきました皆様に心より御礼申し上げます。

令和2年11月

鹿児島大学附属図書館長 橋口 知

趣 旨

令和二年度の貴重書展示では、鹿児島の「うた」を取りあげることにいたしました。和歌や漢詩などの伝統的な「書き言葉」の歌はもちろん、民謡、薩摩琵琶、剣舞、島唄や琉歌などを広くとりあげ、鹿児島の詩歌の流れを一望することを試みております。

いわゆる「一点物」の資料や、読みすてられてしまいかねない「雑本」に眠っている歌を掘りおこすことで、見えてくるものは少なくありません。鹿児島は、古い歌が保存される集積地点であるとともに、行き交う人によって歌がもたらされ拾いあげられてゆく交錯地点であり、そして近代にあっては鹿児島の歌が全国で流行してゆく、「うた」の噴出点でもありました。

ひとつひとつの「うた」の背後に、どれほど大きな時間と空間の広がりがあるか。ぜひ、その眼でお確かめいただき、楽しんでいただきたいと思います。

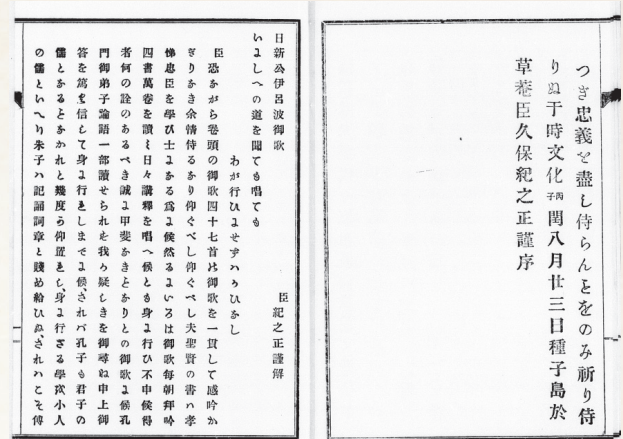
目 次

和歌	薩摩の歌、「日本」へ
日新公いろは歌…………… 1	紫影居士『勇壮活発新剣舞』…………… 8
税所敦子編『内外詠史歌集』…………… 1	西條八十作詞『大山将軍』（『祖国の護』）…………… 8
『松楓集』…………… 2	Column 薩摩琵琶——力強さと優しさ…………… 9
八田知紀『知紀十五首巻』…………… 2	海に浮かぶ歌
Column 玉里文庫蔵『歌集』から見える薩摩の和歌 …… 3	『月照上人五十回忌追悼詩歌集』…………… 10
漢詩	泉芳郎『詩集 オ天道様ハ逃ゲテユク』…………… 10
琉球の漢詩『東遊艸』三巻…………… 4	Column 『南島雑話』の中の島唄…………… 11
西村天囚『聾評閨怨』…………… 4	歌を継いだ人々
Column 薩摩の漢詩…………… 5	短歌雑誌『にしき江』…………… 12
歌を見出した人々	学校と文藝…………… 12
高木善助『薩陽往返記事』…………… 6	歌のある小説
『琉歌集』…………… 6	海音寺潮五郎『南風薩摩歌』…………… 13
Column 琉歌…………… 7	島尾敏雄『はまべのうた』…………… 13

日新公いろは歌

島津忠良^{ただよし}（日新齋）が作成した、いろは47文字を頭に詠み込んだ47首の和歌。天文8年（1539）から14年（1545）にかけて作成され、翌年に連歌師の半松齋宗養^{はんしょうざいそうよう}を介して前関白近衛種家^{このえたねいえ}に献上された。薩摩の武士が守るべき道徳や教訓を説いたもので、近世薩摩藩で行われた武士の子弟の「郷中」教育において用いられたことから、「薩摩論語」という異名でも知られる。作者忠良は島津分家の伊作家の出身ながら、実子貴久^{たかひさ}を島津本宗家に養子として送り込み守護とすることに成功し、戦国大名島津氏の発展の基礎を築いて、島津家中興の祖と仰がれた。

「日新公いろは歌」は江戸期の写本が数種知られているが、図版の『日新齋忠良公伊呂波御歌』^{いろは おんうた}は薩摩藩士の久保之正^{ひくいしょうかん}が文化13年（1816）に注解と序跋を加えたもので、明治18年（1885）に東京麗城館により刊行された。（内山）

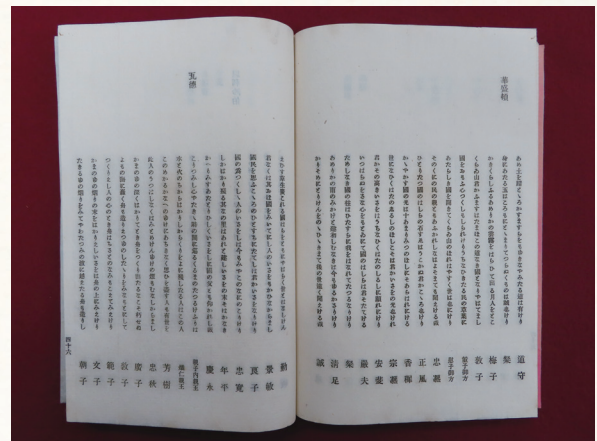


『日新齋忠良公伊呂波御歌』 玉里文庫蔵

さいしよあつこ 税所敦子編 『内外詠史歌集』

明治28年（1895）刊 2冊

編者の税所敦子は、明治8年（1875）に権掌侍^{ごんしょうじ}に任じられ、同33年（1900）に76歳で亡くなるまで明治天皇とその皇后一条美子^{いちじょうはるこ}（のちの昭憲皇太后）の宮廷に仕えた。敦子が書いた本歌集の序によれば、和歌の道を復興しようとする明治天皇は、近侍する人々にも日々題を与えて和歌を詠ませており、詠史（歴史上の出来事や人物などを詩歌に詠む）の題が出されることもあった。そうした際に「証歌」（語句・用語法などの証拠となる歌、根拠として引用する歌）を探して空しく時間を過ごした経験をもつ敦子は、自分が見聞きした詠史和歌を記録しておくようになった。こうして敦子が蓄積した詠史和歌の冊子を、出版すれば初学者の「たより」（よりどころ）にもなろうと勧める人があり、内々で高崎正風^{たかさきまさかぜ}（当時の御歌所長^{おうたどころ}）の許可も得て世に出すことになったのがこの歌集だという。



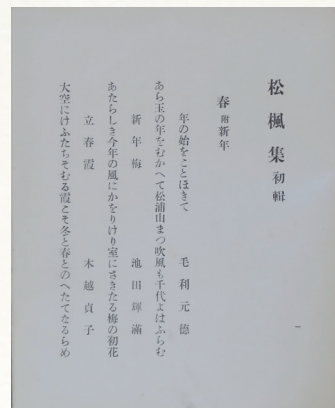
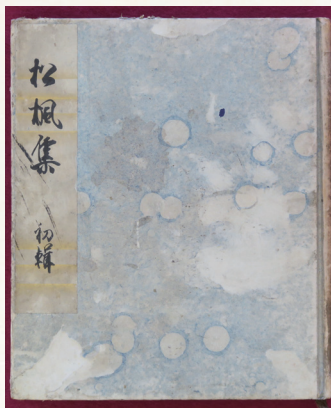
税所敦子編『内外詠史歌集』 玉里文庫蔵

本書の詠史和歌は、そこに詠まれている人物毎にまとめられ、題名の「内外」が示す通り、日本国内だけでなく海外の著名人についての和歌も収録されている。例えば、図版の丁にみえる「華盛頓」はアメリカ合衆国初代大統領 George Washington (1732-1799) のことであり、「瓦徳」はイギリスの機械技術者で蒸気機関を発明したことで知られる James Watt (1736-1819) のことである。（金井）

しょうふうしゅう 『松楓集』

明治42年(1909)刊 1冊

本書は、桂園派の歌人、松浦辰男^{まつうらたつお} (1844-1909) およびその一門96名の和歌を、宮澤^{みやざわ} 葉^はが編者として刊行したもの。題名は松浦の亭号「松楓亭」に因む。松浦は明治31年(1898)ごろから社友の歌集を計画していたが、十年余の歳月を経て死の半年前に実現した(兼清正徳^{かねきよまさのり}『桂園派最後の歌人松浦辰男の生涯』作品社)。松浦は初め^{かがわかけき} 香川景樹^{かがわかげつね}の長男の香川景恒^{かがわかげつね}に入門、その没後^{まつなみすけゆき}は同門の松波資之^{まつなみすけゆき}に師事した。東京市ヶ谷の松浦の自邸には、桂園派の正統と松浦



『松楓集』表紙と本文(鹿児島大学附属図書館蔵)

の人格を慕って田山録彌^{たやまろくや}(花袋)、柳田國男^{かたがや}、宮崎八百吉^{みやざきや おきち}(湖処子^{こしよし})ら文学に志す多くの若者が集った。

鹿児島県の入集者は7名、沖永良部島和泊^{わどまり}の土持綱安^{つちもちつなやす}・西彦熊^{にしひこくま}・川畑祝人^{かわはたけのいづみ}・川平植吉^{かわひらえきよ}・永野萬吉^{えののり}・沖島會徳^{おきしまつとむ}、串木野の加藤雄吉^{かとうゆうきち}である。土持綱安は、西郷隆盛が沖永良部に流されていた時に世話をした土持綱照の二男で、明治22年に上京し、田山花袋の紹介で松浦に入門したが、同25年に師友に惜しまれながら故郷へ帰った。西以下の沖永良部の面々は土持の紹介によって入門したものであろう、1首ずつの入集である。土持は18首入集しており、花袋(24首)、宮澤(22首)に次いで多い。加藤雄吉は5首入集、明治33年に帰郷し、郷土史家として筆を振るうが大正7年病死する。(丹羽)

八田知紀『知紀十五首巻』

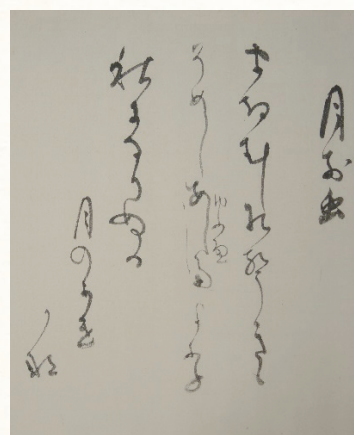
安政3年(1856)成 卷子本1巻

作者の八田知紀^{はつたともりのり}は幕末の薩摩藩士・歌人。寛政11年(1799)生、明治6年(1873)没、75歳。通称喜左衛門、号桃岡^{とうこう}。

当時京都で一派をなしていた歌人香川景樹^{かがわかげき}(1768-1843)に学び、幕末の薩摩藩と和歌を結びつけ、のちに明治政府内の御歌所^{おうたどころ}で活躍する高崎正風^{たかさきまさかぜ}・税所敦子^{さいしよあつこ}らを育てた。また当時琉球王の摂政であった浦添朝熹^{うらそえちようき}の香川景樹への入門を仲介した人物としても知られる。

八田知紀は、歌は「心に感ずる即ち誠実を言出したもの」と平明かつ語調を第一とする香川景樹の歌風を継承しており、収録された15首も技巧の少ない、わかりやすい歌が並んでいる。

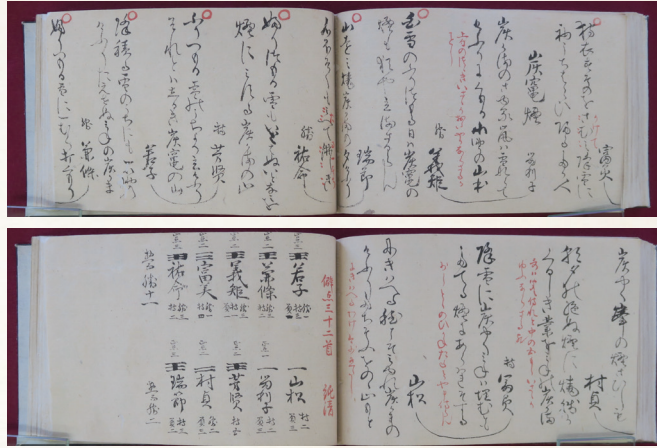
また15首は八田知紀の歌集『しのぶぐさ』(安政2年刊)2編3編から10首を引用しており、安政3年春に成立した本書と『しのぶぐさ』との関係がうかがえる資料である。(亀井)



月前虫
まつむしの声きゝ
そめしあしたより
秋になりぬる
月のかげ
かな

玉里文庫蔵『歌集』から見える薩摩の和歌

和歌は中近世においては一般に上層の風雅なあそびであって多くの民衆には縁遠い存在であった。しかし、近世後期になると京都の公家（たとえば日野家や飛鳥井家、千種家など）や国学者の指導を直接、間接に受けた者が現れる。堂上公家の和歌の流れと地下の和歌との交錯する記録が玉里文庫の『歌集』三冊である（地の部3番2028）。



玉里文庫『歌集』に見える点取歌合

本書は、若き日の島津久光（當時は忠教）が和歌修業としてさまざまな詠草類を自ら筆写したもので、多くは天保年間に詠まれたものである。「定家卿六百年御法楽和歌」（藤原定家は仁治2年（1241）没）や後醍醐天皇五百年忌の詠歌、近親者の追善としては江戸で行われた島津齊彬の生母賢章院十三回忌追善和歌（飛鳥井雅光の出題）、天保9年（1838）4月の京都における八田喜左衛門（知紀）母七十賀月次歌会の詠歌もある。数多く記録されているのは久光の和歌の師長野彦兵衛祐喬や谷山角太夫純清の詠草、それと今和泉島津家の3代当主忠厚（のち山松と改名）を中心とする月並歌会の記録である。谷山純清を判者として天保15年（1844）12月に田之浦邸で催された点取の歌合（図版）を見てみよう。今和泉家の当主と家臣との雅やかなあそびの一齣が窺える。参加者は10名。左方に山松、留利子、（曾山）芳賢、村貞、祐命、右方に若子、（伊集院）兼條、義矩、富美、瑞節である。そのうち「留利子」は山松の側室（加治木島津家に養子に入った久徳の実母）、瑞節は今和泉家の医師。歌合は左右に分かれて同じ題で和歌を読み合い優劣を競うが、判者の合点（僻点）や批評が添えられる。歌の右に朱の○印が見えるが、これが判者の付けた点で、その合計は歌合の末尾に記されている（図版下段参照）。今回は右方（上段）の圧勝、個人でも山松は惨敗の呈である。例として最後の山松の歌と批評を掲げておこう。

（題：炭竈煙）

山松

にきはへる程こそみゆれ／けふりたちそふをのゝ山もと

にきはへるわけ今少有たし

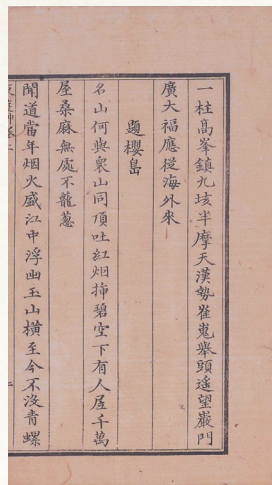
こうした歌会は各所で開かれたが、とりわけ上級武士の風光明媚な別荘で同好の士が集まって開催されることが多かった。一般の武士たちも普段から訓練に励んだ。木脇啓四郎は晩年の回想の中で、十七八の頃（天保5、6年）、歌題を書いた紙を盃に盛り、それを引きながら12時間和歌を詠み続けたこと、それがどんな題にも対応できる能力を養ったとしている『萬留』。

幕末になると八田知紀の門下、高崎正風、黒田清綱、鎌田正夫らが薩摩歌壇を牽引するとともに宮中御歌所を拠点に全国に裾野を広げた。鹿児島県内でも各地に結社ができ、新聞や雑誌といったメディアによってさらなる大衆化が進んでいくのである。（丹羽）

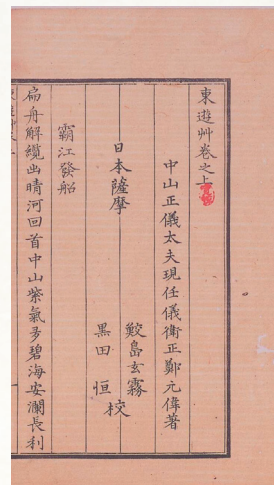
琉球の漢詩 『東遊艸』 三卷

天保 14 年 (1843) 存

鮫島玄霧「東遊艸序」(天保14年(1843)1月15日)によれば、天保13年(1842)冬、徳川家慶の第12代將軍就任慶賀のため琉球から賀慶使が派遣された。正使尚元魯、儀衛正鄭元偉、樂師魏學賢は江戸に一ヶ月滞在中、薩摩藩士の鮫島玄霧と親交を結んだ。彼らは漢詩文に明るく、中国に滞在したこともあり、中国の漢詩文の法則を身につけており、日本の学者が書物だけで学習するのとは異なっている。帰国にあたり、三人が琉球から江戸までの道中で作成した漢詩をまとめた冊子3冊をもらい受けた。島津斉彬公(藩主就任前)に申し上げたところ、出版を命ぜられたというものである。巻上は鄭元偉の詩、巻中は魏學賢の詩、巻下は尚元魯の詩を収める。正使の尚元魯(浦添朝憲)は琉球王の摂政。鄭元偉は、琉球の著名な書家で、久米村(中国系渡来人の子孫、中国外交の人材を輩出した)の出身。魏學賢も久米村の出身。図版は、桜島を詠んだ鄭元偉の詩二首。第一首は桜島が噴煙を上げているのに麓に人家の多いことに驚いているもの、第二首は安永8年(1779)の大噴火について詠んでいる。(高津)



『東遊艸』巻上・題櫻島
沖縄県立図書館蔵
CC BY 4.0

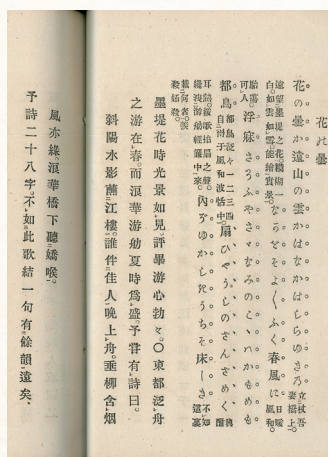


『東遊艸』巻上・巻頭
沖縄県立図書館蔵
CC BY 4.0

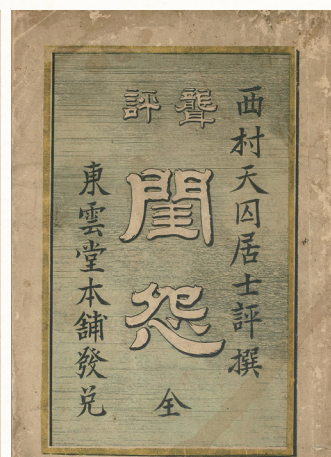
西村天囚 『聾評 閨怨』

明治 21 年 (1888) 刊 1 冊

『聾評 閨怨』は、西村時彦(天囚)が明治21年(1888)秋に名古屋の老舗料亭得月楼滞在中に聞いた俗謡に漢文で批評を加えたものである。この時、西村は中山道を経て、名古屋に入るが旅費がなくなった。そこで名古屋の書肆東雲堂に、先頃小説『屑屋の籠』を出版して文名をあげた西村が俗謡の評釈を漢文で書くという約束で旅費を工面してもらったのである。「聾評」は素人の評価という意味。本文は、和歌集の部立に倣い、春、夏、秋、冬、雑、別集の5つに区分し、38首の俗謡(端唄、地唄など)が収録されている。漢詩と俗謡と



『閨怨』12頁・花の曇

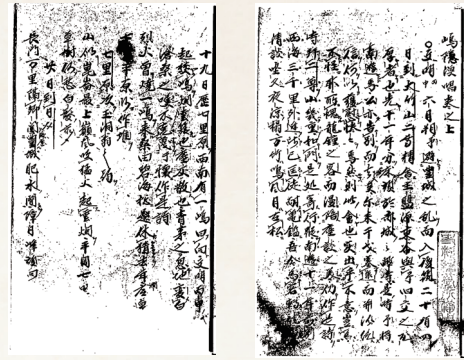


『閨怨』表紙

は、声調が異なるが興趣は一致するので、漢詩を読む心で、俗謡の眼目を評価したと述べ、漢詩は学識に基づくので変化自在であるが、俗謡は心中の感情をそのまま述べるので、女子供でもできるが、千篇一律になりやすいという。西村天囚(1865-1924)は、明治・大正期の大阪朝日新聞記者、漢学者、本名時彦。鹿児島県種子島の出身。端唄は、江戸時代に行われた三味線を伴奏とする短い歌曲で、天保年間以降に流行した。図版の「花の曇」は、江戸の隅田川の春景色と屋形船で遊ぶ人々の様子を羨む視点から歌われている。西村は、浪華(大阪)の夏景色を詠んだ自作の漢詩を掲げ、余韻の点で自作が劣るとしている。(高津)

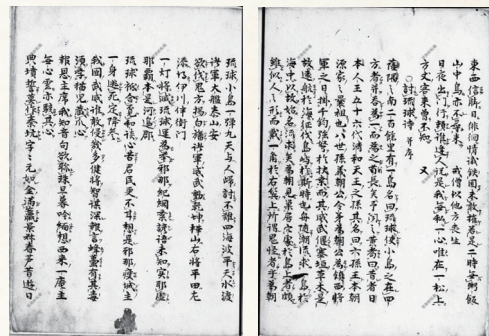
薩摩の漢詩

薩摩地域で漢詩文の創作が行われたのは、桂庵玄樹の入薩以降のことである。桂庵玄樹(1427-1508)は、山口出身の臨濟宗の僧侶で、応仁元年(1467)天与清啓を正使とする遣明船に士官の一人として参加、文明5年(1473)帰朝し石見、周防、長門、豊後、筑後、肥後を転々とし、文明10年(1478)2月島津氏第11代当主島津忠昌(1463-1508)によって薩摩に招かれた。その後、南宋・朱熹の新注による『大学章句』を日本で初めて薩摩で刊行し、薩南学派(薩摩の儒学)の祖とされる。漢詩集に『島陰漁唱』がある。図版は、文明3年から5年間続いた桜島の大噴火を詠んだ詩である。



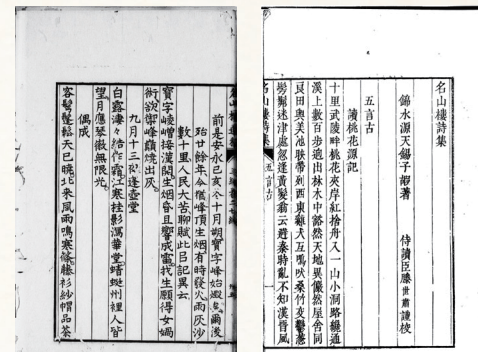
桂庵玄樹『島陰集』巻頭及び桜島噴火の詩
東京大学史料編纂所蔵

南浦文之(1555-1620)は、戦国末から江戸初期の禅僧、名は玄昌、号は南浦で、日向の人である。桂庵玄樹の学問を受け継ぎ、四書に朱子学に基づく訓点(文之点と呼ばれる)を施した。島津氏第16代当主島津義久(1533-1611)、第17代当主義弘(1535-1619)及び家久(1547-87)に仕え、外交顧問として外交文書作成に当たった。著作に『南浦文集』(寛永2年(1625)古活字版)『南浦棹歌』などがある。慶長14年(1609)島津氏は三千名の兵を率いて琉球を攻め、首里城を陥落させ、尚寧王を人質にした。これを漢詩にした「討琉球詩十首並序」が『南浦戲言』33-35丁に収録されており、琉球侵攻における薩摩側の観点を知ることができる。



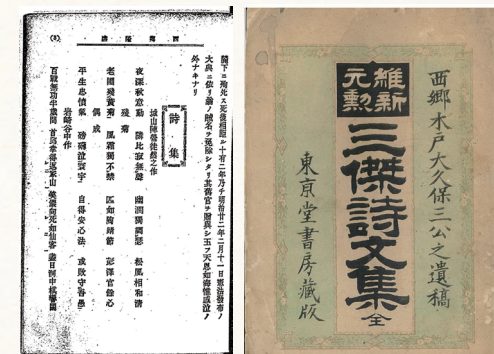
文之玄昌『南浦戲言』討琉球詩
鹿児島大学附属図書館玉里文庫

島津久徴(1752-1809)は、加治木島津家第6代領主、号は、天錫、錦水。天明4年(1784)に加治木の人材育成のため郷校毓英館を創立している。漢詩集に『名山楼詩集』(初編：寛政11年(1799)刊、二編：文化5年(1808)刊)があり、板木が現存する(始良市教育委員会)。また、没後に三男の村橋峻によって『名山楼詩集三編』二卷(文政5年(1822)序)が刊行されている。図版は、『名山楼詩集』初編の巻頭と三編の桜島を詠んだ詩。



『名山楼詩集三編』下巻
島津天錫『名山楼詩集』巻頭
鹿児島大学附属図書館玉里文庫

西郷隆盛(1828-77)は、幕末、明治維新の元勳。南洲と号した。薩摩藩下級士族の出身。戊辰戦争では大総督参謀となった。明治6年、征韓論を唱えて辞職。明治10年、西南戦争に敗れ城山で介錯によって亡くなった。170首を超える漢詩が残されている。図版巻頭の詩は、この題名によれば、明治10年2月の拳兵後、熊本、宮崎での戦闘に敗れ、9月鹿児島に戻って城山に立てこもった時の作品である。異説もある。(高津)



『維新元勳三傑詩文集』表紙・西郷詩集
鹿児島大学附属図書館蔵

高木善助 『薩陽往返記事』

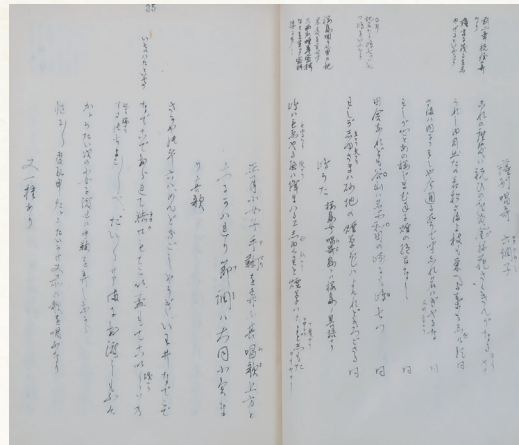
一般的には閉鎖的なイメージをもたれがちな近世の鹿児島（薩摩藩領）であるが、実際には琉球をはじめ、上方や北陸など各地の商人が出入りしていた。彼らのなかには、鹿児島城下や領内の詳細な紀行文を書き残している者もあり、民謡についての記述も見られる。大坂商人の高木善助（庸之）もその一人である。

高木は、^{ずしよひろさと}調所広郷による藩財政改革と殖産興業を支援した大坂の平野屋五兵衛の分家筋の人物で、薩摩国産の紙の製造と販売に携わった商人である。文政11年冬から天保12年春までの12年間に大坂と鹿児島の間を6回往復し、『薩陽往返記事』『薩陽日三州経歴之記事』を著している。他方、紀行画帳の『西陲画帖』には、桜島や鹿児島城下町など領内各地の鳥瞰図が描かれている。

文政12（1829）年2月、高木らが鹿児島城下を出発し、南薩の各地を巡覧したのち湯之元（現日置市東市来町）の旅宿に逗留した際、酒宴で「近辺の^{こぜ}替女芸子来りて、国ぶし・六調子・しよんがぶしなど聞きて入興」と記している。「国ぶし」は地方の民謡、「六調子」は南九州各地で歌われた民謡の一種とみられ、「しよんがぶし」は、開聞岳の西麓に位置する脇浦（現指宿市開聞十町）を発祥とする民謡である。（小林）

【参考文献】

- ・宮本常一・谷川健一・原口虎雄編（1969）『日本庶民生活史料集成』第2巻，三一書房。
- ・高木善助著・東條広光編（2016）『大阪商人旅日記 薩陽紀行一文政・天保期の南九州への旅』，鹿児島学術文化出版。



『薩陽往返記事』鹿児島県立図書館蔵

『琉歌集』

半紙本 1冊 写

幕末・明治薩摩藩の文化官僚であった木脇啓四郎の次男藤次郎（1859-1932）が沖縄に滞在していた間に収集した琉歌集。102節704首を収録する。

琉歌にはいくつかの形があるが、和歌の短歌（57577）に相当するものとして上句8音8音、下

句8音6音の計30音を1首とした形が最も多く残っている。琉歌は三線などの楽器にのせてうたう「ウタ」を節（曲）といい、節にあてはめることを優先して歌詞は制約を受けることがある。

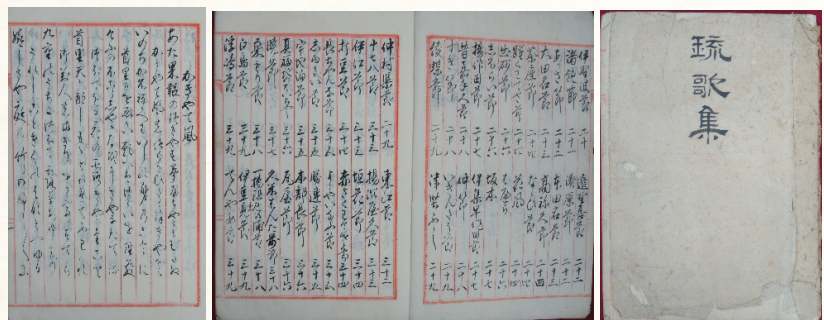
藤次郎は明治20年代後半から沖縄県師範学校の書記（のちに助教諭心得）として勤務したことがわかっており、仕事の傍らに精力的な収集活動を行っていたこと示している。

収録されている琉歌の例を挙げてみよう。ローマ字による読み、および大意は『琉歌大成』による。

けふのほこらしやや なをにぎやなたてる つぼでをる花の 露きやたごと

Kiyunu fukurashaya naunijana tatiru tsibudi wuru hananu tsiyu chata gutu

大意：今日の嬉しさは何にたとえようか。つぼんでいる花に、開花を促す露が来たような感じだ。（亀井）



歌を見出した人々

琉歌

琉歌は沖縄本島を中心にして生まれた叙情歌である。八・八・八・六音の三十音からなる定型の短歌が一般であるが、仲風なかふうとよばれる和歌風の音数（五・七）の混じったものや、八音を連ねて最後を六音で結ぶ長歌形式のものもある。音楽と舞踊とが深く結び付いて発達し、現代に受け継がれている。

作者は王子・按司あじ・親雲上おやくむいら首里の上層階級から農村の女、遊女に至るまで多くの人に歌われた。現存する約3000首のうち、読み人知らずの歌が1700首にのぼることから初期琉歌の共同体の歌としての性格がうかがえる。

琉歌の成立について、その起源は明確ではなく、どのように歌われたものか不明な点も多い。発生事情としては舞踊音曲と深い関わりを持つものと考えられ、琉球各地に残されたオモロ・ウムイ・キューナなどの古謡を土台として成立し、整備されていったと考えられる。

現在の琉歌の直接の母胎は『おもろさうし』の中に整えられたオモロに遡ることができ、オモロが有していた叙事性に叙情性が加わり、さらに海上活動による世界観の広がり、阿嘉あかいんこ犬子らオモロ歌人の勃興さんしん、三線の渡来など様々な要因によって、琉歌として定型化していった。

当初は楽器に合せて節を付けて歌うための歌であったが、琉球王朝の貴族・士族の間では教養としての「読む」ウタが発達し、和歌を意識した教養人たちによって18世紀初頭には「琉歌」と呼ばれるようになったと考えられる。

ここで琉歌の例を1節2首挙げてみよう。ローマ字による読みを付けている。作田ちくでんぶし節は五穀豊穰、国の始まり、長寿繁栄などをテーマとした歌である。

作田節

あかいんこ おもろねあがり
赤犬子神 音 東 神 両人作

穂花咲出ば 塵泥も附ぬ 白ちやねやなひち 畦枕ら

Fubana sachi diriba chiri fijin tsikanu shirachaniya nabichi abushi makura

大意：稲の穂花が咲き出ると塵も泥もつかないで、白種子の穂は風になびいて畦を枕にしている。

銀白なかい 金軸立て 計てつき余そ 雪の真米

Nanja usi nakai kugani jiku tatiti hakati tsichi amasu yuchinu magumi

大意：銀の白に黄金の軸を立てて脱穀すると、雪のような美しい米が計りあまるほどである。

鹿児島大学附属図書館木脇家文書には明治期に木脇藤次郎の収集した琉歌を書き留めた『琉歌集』がある。本展観にも展示しているのでぜひご覧いただきたい。

【参考文献】

『おもろさうし』（外間守善校注、岩波文庫）

『田植草紙 山家鳥虫歌 鄙廼一曲 琉歌百控』（新日本古典文学大系62、岩波書店）

『増補琉歌大観』（島袋盛敏著、沖縄タイムス社、1964年初版）

『琉歌大成』（清水彰編著、沖縄タイムス社、1994年）

（亀井）

紫影居士『勇壮活発 新剣舞』

明治30年(1897)刊 1冊

剣をかまえ、明治維新や自由民権運動に参画した人々の詩を吟じながら舞う「剣舞」の稽古のための本。剣舞は薩摩琵琶とならんで、明治のハレの席にはつきものの芸だった。江戸学の大家三田村鳶魚^{みたむらえんぎよ}は、大正時代の詩吟の節まわしには剣舞の影響が残っていたと書きのこしている。

剣舞の独習書が流行するのは自由民権運動の収束後、とりわけ川上音二郎の戦争劇などを通じて戦争の芸能化がすすむ日清戦争以後のこと。明治27年(1894)以後の剣舞書には「新剣舞」あるいは「改良剣舞」を名乗るものが多い。使い込まれてボロボロになっていることの多い新剣舞の本にほとんど必ず入っているのが、西郷南洲(隆盛)の『偶成』(写真)や『辞世』である。「五大州をも丸呑にせん勢ひ」云々の語に、伝説の人物と化しつつあった西郷のイメージをうかがうことができるだろう。(多田)



『勇壮活発 新剣舞』より、西郷南洲『偶成』(個人蔵)

西條八十作詞『大山将軍』(『祖国の護』)

軍歌集『雄叫』所収

日露戦争における大山巖^{おおやまいわお}の事蹟を歌う。昭和10年(1935)、歌手の小野巡がビクターからデビューするにあたって、西條八十^{さいじょう や そ}が作詞し村越^{むらこし}くにやすが作曲した。一番の歌詞を紹介しておこう。

海濤天を衝くところ 燃えて火を吐く桜島
薩摩が生める快男児 姓は大山、名は巖

ビクターのSPレコード(国会図書館蔵)が発売された後、西條の『少年愛国詩集』(昭和13年(1938))や伊藤和夫編『銃後の花』(昭和12年(1937))に収められるほか、『軍歌雄叫』^{おたけび}に掲載されつづけた(写真)。『雄叫』は陸軍予科士官学校生徒隊が毎年刊行した軍歌集で、確認のかぎりでは昭和11年(1936)の版以降、『大山将軍』が収録されている。

西條は当時、全国各地の民謡をあたらしく作る「新民謡」に積極的にかかわった。鹿児島では中山晋平とともにおはら節を採取していて、西條の代表作である『東京音頭』の前奏には、おはら節が用いられている(西條『唄の自叙伝』)。(多田)



軍歌集『雄叫』、左から昭和11年、13年、16年版(個人蔵)

薩摩の歌、「日本」へ

薩摩琵琶——力強さと優しさ

薩摩琵琶はいわゆる「盲僧」が平家琵琶を改良したもので（起源説が数多く一定しない）、「座頭歌」などとも呼ばれながら、江戸時代を通じて薩摩の郷士を中心に愛吟された。絃をおさえる指の圧力によって音の高さを変える奏法が特徴である。天明2年-3年に鹿児島を訪れた橘南谿の『西遊記』には、「其調正しく其うた雅にして、他の国の琵琶とは似もよら」ない薩摩琵琶の音を、大隅の名手池田甚兵衛と鹿児島の「宝生といへる法師」の演奏で聴いたことが記されている（「琵琶の妙手」）。



薩摩琵琶歌曲集。左から明治41年『薩摩琵琶歌』、同年『精撰薩摩琵琶歌』（第13版）、同年『妙曲琵琶歌』（改訂第4版）（個人蔵）

明治以後、薩摩琵琶は全国的に普及する。一地域の芸能としては考えられないほどの流行に寄与したのは、明治天皇と、そして薩摩出身の歌人や漢詩人だった。明治天皇は島津邸の園遊会などで西幸吉や吉水錦翁の演奏を聴いた。明治初期の新曲のうち、西南戦争を題材とした『城山』は勝海舟の作詞だが、御歌所歌人である高崎正風の添削を受けたことが知られる（海舟『氷川清話』）。正風はほかに『小督』『潯陽江』などを作詞した。台湾出兵を率いた北白川宮の事蹟を歌う『台湾入』は、西村天囚の作詞である。

近代の薩摩琵琶は戊辰戦争（『白虎隊』）、西南戦争（『城山』）、日清戦争（『威海衛』）、日露戦争（『廣瀬中佐』）と戦争を取りこんで展開しており、したがって新体詩や唱歌、軍歌などの、新時代の「うた」と密接に関わりつづけた。竹内隆信選『新体詩歌』（明治15-16）には『西郷追慕の歌』という題で海舟の『城山』が入集している。『雪中の斥候兵』は佐佐木信綱の軍歌『雪夜の斥候』にとりこまれ、『廣瀬中佐』は軍歌として第二次世界大戦まで歌われつづけた。森鷗外が「小叙事詩」として薩摩琵琶曲『長宗我部元親』を作詞してもいる。日露戦争海戦史を描いてベストセラーになった『此一戦』の作者水野廣徳は、奉天で戦死した杉山忠吉を歌う『別れの国家』を聴いたことが、執筆の契機だったと述べている（『此一戦』自序）。薩摩琵琶は日本の近代詩の、隠されたもう一つの顔だったわけだ。

戦を歌う悲壮な歌のイメージが強いけれども、一方で薩摩琵琶には、心を教えはぐくむような優しさもある。新渡戸稲造『武士道』（明治41年日本語刊）が軍人の精神をはぐくむものとして薩摩琵琶を挙げたように、日露戦争以後には精神錬磨の歌としての側面が強調された。（多田）

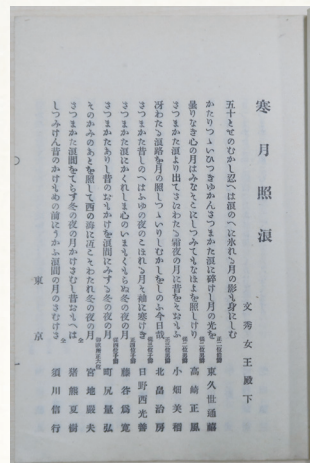
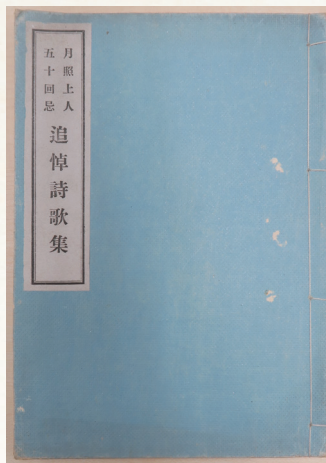
【参考文献】

宮崎真素美『『新体詩歌』の語るもの——文芸・政治・教育の交差する場所——』（2004年5-6月「文学」）
 薦田治子「日本音楽における十九世紀——薩摩琵琶の場合」（2009年11-12月「文学」）

『月照上人五十回忌追悼詩歌集』

明治41年(1908)刊 1冊

月照(忍向)は幕末に活躍した清水寺成就院の住職で、尊皇攘夷派の志士たちを匿い、水戸藩への密勅降下に関与するなど反幕府の活動を行った。安政5年(1858)冬、幕府の追捕を逃れ西郷隆盛・平野国臣(福岡藩士)とともに鹿児島に下ったが、藩の実権を握った島津豊後・新納駿河ら藩首脳部は幕府を恐れて月照を「日向送り」とする。絶望した月照と西郷は鹿児島湾で入水、西郷は蘇生したが、月照は絶命した。時に安政5年11月16日、月照46歳であった。



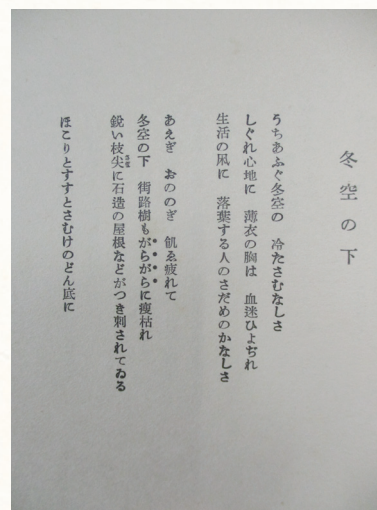
『月照上人五十回忌追悼詩歌集』表紙と和歌の冒頭(個人蔵)

月照の五十回忌および西郷の三十年祭の年に当たる明治40年(1907)11月15日京都清水寺で法要が営まれ、寺院の住職や西郷菊次郎京都市長、折田彦市第三高等学校長など大勢が参列した。本書はこの日献呈された追悼詩歌をまとめて翌年に刊行したものである。漢詩78首、和歌824首(うち西郷三十年祭に寄せるもの8首)。和歌の兼題は「寒月照浪」。皇族や華族、遺族、そして多くの一般市民が詩歌を寄せている。日露戦争後の国家の高揚感を背景に、民衆の故人への追慕の念が愛国心と結び付いて結晶しているといえよう。(丹羽)

泉芳朗『詩集 オ天道様ハ逃ゲテユク』

昭和9年(1934)刊 1冊

泉芳朗(明治38年(1905)-昭和34年(1959))の初の詩集『オ天道様ハ逃ゲテユク』は、昭和34年(1959)に刊行された『泉芳朗詩集』と内容に重なりはあるが、そこにあらわれた詩人としての泉の姿は名瀬市長をつとめ奄美復帰運動の父として知られた泉のイメージとはおよそ異なっている。大正15年(1926)から白鳥省吾の詩雑誌「地上楽園」に参加し農民詩人として活動した泉は、都市生活をさだめなく飛びちらう落葉にたとえるヴェルレーヌ的感性と民衆



『詩集 オ天道様ハ逃ゲテユク』表紙と『冬空の下』部分(個人蔵)

詩・農民詩の発想、そして萩原恭次郎たちアナキストの詩に通じる現実認識をあわせもつ、「お天道様は何処へ逃げて行つたのか」(「赤い雑草」)と嘆じる慟哭の詩人だった。

本詩集はもともと昭和4年(1929)刊行予定で、紆余曲折を経て出版に至ったことが巻末の「始末記」に記してある。「農民決死隊」が組織された昭和7年(1932)の5・15事件をはさんだ農民認識の変化も興味ぶかいが、二つの時期を貫くものもある。「お天道様」が見えなければ寒さにおびえ、「お天道様」の下では烈日にあえぐ農民の、二律背反の感情である。(多田)

海に浮かぶ歌

『南島雑話』の中の島唄

『南島雑話』は、お由羅騒動に連座して嘉永3年(1850)に奄美大島に遠島に処された薩摩藩藩士・名越左源太が、19世紀初期の伊藤助左衛門の記録などを元に著したとされる、大島の動植物、風俗、生活などを絵入りで記録した民俗誌である。そこには当時の大島の「うた文化」の様子を伝える絵図が見つかる。

なかでも、島唄の伝統的な歌い方である「歌掛け」の様子を描いた「掛哥ノ図」(図1)は貴重である。左源太によれば、昔の歌掛けは三味線を使わず、男女が向かい合って「手まんかい」をしながら、手拍子を打って歌い合うものだったらしい。「哥は当座につくたて作立、すらすらくちごもらぬようにうたひ出ものを上手とし、哥の趣向遅く出るをまけとす」とそのルールも説明されており、一種の勝負であったことが分かる。

旧暦八月に奄美の各集落で踊られる「八月踊り」を描いた絵(図2)もある。「一日一夜、村中家毎に行廻り躍る」、「太鼓自製の外、鳴物なし」とあり、チヂンの伴奏だけで歌い踊りながら、集落の家を一軒一軒廻る「ヤーマワリ」という現在の八月踊りの習慣が、当時からのものであることを確認できる。

奄美各地に唄を伝える上で重要な役割を果たしたとされる「ゾレ」と呼ばれる遊女の姿もある(「ゾフリ」図3)。左源太が描いたのは「満る」という名の女性。「琉球より出奔して大嶋に来るもの間々あり」、「謡をうたひ、三線をひき渡世す」とその活動が短く記されている。

「群遊の図」(図4)は賑やかな酒席の図だが、右上で三味線を弾く男の姿が目を惹く。三味線に関しては、別のところに、「蛇皮又紙を洗ひきにしたるものあり。皆琉球より求め来る」という記述があり、沖縄との深い関係が窺えるが、この図に描かれている三味線は四角く角張っていて、撥の形からも本土の三味線にしか見えない。おそらく江戸時代末期の大島では、大和の文化と琉球の文化が混在しており、音楽もまた例外ではなかったのだろう。(梁川)

【参考文献】

- 名越左源太『南島雑話1』東洋文庫、1984年
 名越左源太『南島雑話2』東洋文庫、1984年
 河津梨絵『『南島雑話』の構成と成立背景に関する一考察』『史料編集室紀要』(29)、2004年



図1 掛哥ノ図
 (『南島雑話』奄美市立奄美博物館蔵)



図2 八月踊り
 図3 ゾフリ
 (『南島雑話』奄美市立奄美博物館蔵)

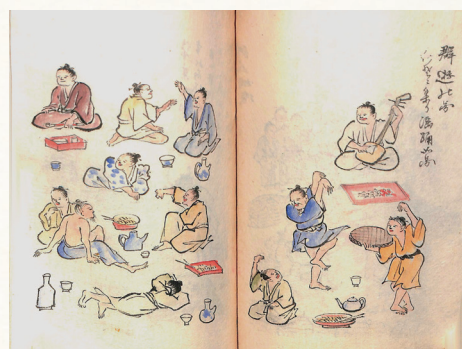


図4 群遊の図
 (『南島雑話』奄美市立奄美博物館蔵)

短歌雑誌『にしき江』

大正3年(1914)から今日まで続く、鹿児島県の短歌雑誌。錦江社刊。鹿児島大学附属図書館は大正6年(1917)5月号～大正14年(1925)10月号までのうち37冊を所蔵する。鹿児島歌会や甲突川歌会など鹿児島歌壇を総合する雑誌であり、戦前には鹿児島以外の国内各都市とともに漢口、京城、台北など外地の同人をも多く擁する、地方短歌雑誌としては最大の雑誌の一つだった。創刊時の発行人は鶴田海南(彦二)で、雑誌の存続には南洲崇拜家でもあった鶴田の力が大きかった。

八田知紀や黒田清綱、高崎正風などの流れを汲む同人の歌は、薩摩歌人たちが日本を席卷していた明治歌壇の雰囲気そのまま大正期に移し植えたかのような趣がある。詠草以外にも各歌会の沿革記事、そして加治木常樹や鎌田正夫をはじめとする宗匠の追悼記事はきわめて重要。なお第七高等学校造士館をはじめ、教育界と深く関わったことも特徴で、大正後期にかけては斎藤茂吉の主宰した『アララギ』にも接近した。(多田)



『にしき江』第六卷第七号表紙
(鹿児島大学附属図書館蔵)

学校と文藝

旧制七高造士館には、第一寄宿舍(東寮)・第二寄宿舍(西寮)、第三寄宿舍(南寮)の三つの寮があった。南寮は前二者に遅れ大正9年(1920)にできた。寮の運営は規則に基づき、自治的な運営が行われ、独自の寮歌の存在や同窓会組織「東京東寮会」「京都東寮会」が象徴的に示しているように濃密な人間関係が涵養された。また、西寮は『緑塔』、東寮は『玉帆』という独自の雑誌



七高西寮の雑誌『緑塔』と文藝部の雑誌『啓明』(個人蔵)

を持ち、これに学生の小説、随筆、詩歌が掲載された。文藝部は雑誌『啓明』を発行している。明治37年(1904)、七高学友会の『學友會雑誌』が創刊され、教員と学生がここに論文のほか、詩歌や小説・戯曲を発表する。明治期には漢文の教授らが漢文や漢詩を発表していたが、大正・昭和に入ると専ら短歌や近代詩、散文で、漢詩文は影をひそめる。

鹿児島高等農林学校でも短歌会が発行する『紫原』や文藝部が編集する雑誌『土』(昭和2年創刊)が、翻訳や創作、散文、詩歌を公募して掲載したが、表紙画やカットにも工夫が凝らされ、文藝と美術の協同が図られている。『土』の創刊の言葉には「青年の純情な心の中に、翻然とひるがえり来る美しい情操(中略)これこそ真の人類愛の焔であり、彼等を浄化する唯一の糧であり、彼等が永遠の幸福を醸す唯一の原動力なのだ」とあり、青年特有の気負いや藝術至上主義の意識があふれている。鹿児島師範学校でも『發華』が刊行され、活発に文藝作品の製作が続けられた。(丹羽)

海音寺潮五郎 『南風薩摩歌』

昭和14年(1939)刊 1冊

鹿児島県大口出身の、^{かいおんじちようごろう}海音寺潮五郎の初期小説集。表題作『南風薩摩歌』は西南戦争で戦った逸見十郎太が主人公で、「逸見十郎太が斬り込む時は、^{あき}秋の^{あき}颯風か、^{かみ}雷さまか、^{えだ}枝も^は葉も^と飛ぶ／^{あをやまがら}青山枯し」の歌で幕をあける。『涅槃恋』など同時期の鹿児島を多く描き、後に雄編『西郷隆盛』を著した海音寺の風骨がすであらわれている。

本書は八紘社の「大陸版」。昭和14年(1939)、戦争のただなかで刊行されているわけだが、海音寺の特徴は、現在と地続きであるがゆえに一面的な評価をゆるさない時代として明治を書いた点にある。熊本と鹿児島の境界にそだった海音寺は、人吉で勇戦する逸見をヒーローに据えながら、薩軍に踏みあらされた町の惨状を見落としていない。連戦連勝を信じ込まされていた伊集院の悲劇を描く『薩摩隼人』などは、昭和20年(1945)以降の戦後文学に通じるものさえある。「官」と「賊」、征服者と被征服者は、いとも簡単に変転する——本書にちりばめられた俗謡や詩吟はそうした認識を象徴するかのよう、どこか淋しい響きを放っている。(多田)



島尾敏雄 『はまべのうた』

昭和21年(1946)5月『光耀』第1号所収

加計呂麻島で特攻隊長として駐屯し終戦を迎えた島尾敏雄が、メルヘンの文体で戦争を描いた作品。南の島にやってきた「隊長さん」が小学生の「ケコちゃん」をつれて夜ごと「先生」の家を訪れる、という物語で、タイトルは作中でケコちゃんの父親が歌う不思議な歌に由来する。

千年も万年も見たことのないふかしぎなくぢらがやって来た、いやそれはくぢらではないよ、みなみの島を守りに来たふねだよ

島尾は『ロング・ロング・アゴウ』『徳之島航海記』など歌を引用する小説を多く書いたが、歌の引用は、太平洋戦争中の戦地を描いた戦後文学に共通する技法でもあった。

かごしま近代文学館の島尾敏雄特別資料に収められた「昭和二十年二月三日、四日 島尾隊第一回慰安演芸会プログラム」を見ると、『はまべのうた』の世界がフィクショナルに作られたものであることがわかる。安木節や浪花節、軍歌、『東京音頭』をはじめとする流行歌などが入りみだれるこの演芸会は、加計呂麻島が帝国日本の内部に組みこまれた音の世界であったことをまざまざと示していた。これらの現実の「うた」を切りおとしてメルヘンを成立させた島尾は、以後の作品で、いったん封じこめた戦争の記憶と何度も向きあってゆくことになるのである。(多田)



『光耀』第一号表紙と『はまべのうた』冒頭(個人蔵)

歌のある小説

令和2年度 鹿児島大学附属図書館貴重書公開

かごしまの“うた”

令和2年（2020）11月5日発行

編 者

多田蔵人（法文学系准教授）

執筆者

高津 孝（法文学系教授）

梁川英俊（法文学系教授）

丹羽謙治（法文学系教授）

内山 弘（法文学系教授）

金井静香（法文学系教授）

亀井 森（教育学系准教授）

小林善仁（法文学系准教授）

発 行

鹿児島大学附属図書館

<https://www.lib.kagoshima-u.ac.jp/>

〒890-0065 鹿児島市郡元1丁目21-35

☎099-285-7460

印 刷

斯文堂株式会社

